

演題：「農からの発想～二十一世紀は「農」の時代」

—「スローなまちづくり」で都市とふるさとを再生する—

講師：東京農業大学長 農学博士 進士 五十八氏

進士五十八氏は 1969 年東京農業大学農学部卒業、同校教授、総合研究所所長、農学部長、地域環境科学部長、1999 年より学長となり現在に至っている。これまでに、日本造園学会、日本都市計画学会、東南アジア国際農学会、日本野外教育学会、日本環境教育学会の会長、役員をつとめ、現在は農学、生活学、園芸福祉、社会資本整備、防災会議、自然再生、景観審議、環境保全、造園、教育委員会、持続可能性社会創造、国立公園関係諸団体の役員を務めておられる。

今回は「農」の立場より 20 世紀の矛盾点を明らかにし、農からの発想に基づく、21 世紀の方向につき話を伺った。

ニューヨーク市の北西に、長さ 4 キロ、幅 800 メートルのセントラルパークがある。日比谷公園の 20 倍もあるこの公園を設計したのは、Frederick Law Olmsted (1822-1903)、1858 年のことである。彼は本業以外に奴隷解放、赤十字関係、農場経営等幅広い事業に従事しており、更にこの公園のほかシカゴ万博会場、ハーバード大学キャンパス、ナイヤガラ瀑布の観光地計画等多くの計画や設計を手がけている。彼は自らを Landscape architects (造園家) と呼び、「科学的百姓」(scientific farmer)、「社会計画家」(social planner)の能力を必要とし、これにより人間と自然が調和共存する住み良い環境が実現できると考えていた。当時人口 60 万人のニューヨークにこの大公園を設立したのが、今日摩天楼のなかのオアシスとなり、ニューヨークの景観となっているのは、人間と自然の調和共存を目指した設計者の賜物であろう。

我が国では明治開国以来、東京の近代化に意を注ぎ、皇居前には東京駅、帝国ホテル、鹿鳴館、日比谷公園等次々に計画された。日本には古来、日本庭園の技術がある。これは限られた面積に、広い世界、宇宙を濃縮するもので、小石川後楽園には、太平洋、勢田の唐橋、白糸の瀧等欲しい場所を自由に取り込んでいる。これは逆に拡大すれ



ば、全世界に展開できる、自然その物である。日比谷公園の設計には洋風公園が望まれ、設計者の本多氏は造林学者でドイツより多くの資料を持参し人工と自然のバランスの良くとれた公園を完成した。1915 年明治神宮の設立が計画され、上原氏が設計を担当した。この設計には緑の導入が必要で、建築学のみでは不完全、造園学が必要となり東京高等造園学校が設立された。自然と人間の融和が指向され当時の東京の都市計画も自然に従うものであった。

大正大震災以降、市街地の復興が主体となり、都市計画は道路・下水・港湾が主体となり、公園・緑は計画に入らなくなった。道路、下水は必需品、公園は記念品となった。都市に公園、緑の必要性が認識され、都市計画に加えられたのは戦後昭和 40 年以降のことである。ニューヨークは強固な

岩盤の上であり、高層ビルの建設は容易であり、面積の狭いマンハッタンでは、高層ビルが林立し、それが自然の成り行きであった。東京は軟弱地盤の上であり、耐震構造の高層ビルを造るには難問が山積した。難問に出会えばその解決に努めるのは技術屋の使命で、建物の高層化、超高層ビルの設計に血道をあげた。その結果品川、汐留地区に超高層ビルが林立したが、他に土地があるのに、300mの杭を打ちビルを建てる必要があったのであろうか、エネルギー、資源の無駄遣い、自然の流れに反する所行では無かったか。最近の自然の流れに反する例をあげる。

*軟弱地盤での超高層ビルの建設。

*東海道工業地帯：この地帯は農業に最適。

*亜寒帯で熱帯植物の栽培。

*強酸性湖水での魚の養殖。

冷暖房を完備して極暑極寒の地に住むことが20世紀であった。人間の体は自然、自然に生きることを考えるべきでは無かろうか。

物事の実施に当たっては、自然立地・社会立地・経済立地がある。日本には古来「程々」の観念があり、自然立地、社会立地に基ついて実施されてきた。20世紀は経済立地の時代となった。経済立地を可能にするのは技術屋であり、自然性、社会性を無視して、経済性のみ巻き込まれてしまった。技術屋も冷静な目で環境、倫理、モラルを考え、政治家だけの考えで世の中が決まらぬようにしたい。「工学」では実験を行い、効率の良い条件を求める。しかし狭い範囲では成立しても、広い環境の下では成立せず環境問題が発生する。この矛盾を発見、告発するのが「理学」で、修復するのが「農学」である。「農学」は自然に付いて「理学」に学び、人工については「工学」に学び、その特色を把握して問題を修復する。

関東大震災以降東京はコンクリート・ジャングルを目指し、ヒートアイランド化してきた。自然の喪失、人間性の喪失のみならず、犯罪、殺人、異常性愛など犯罪の温床となりつつある。

これを回復するためには、「緑」の回復、「農」の

回復を急がねばならぬ。「人間と自然」について広く知り、深く考えなければならない。これを具現する理想的人間像として「百姓」をあげたい。百姓とは多くの職業、能力を持つものを意味する。

「農」を管理するためには自然、社会、経済の全てを管理するために「百姓」でなければならない。農業はアグリカルチャー、園芸はホーテイカルチャー、樹芸はアーポリカルチャー。文化はその国の人々の生きる力の源泉である。

「農」は人間生存その物であり、「農」への回帰は急がねばならない。

都市に「緑」と「農」を取り戻すために、市民はそれぞれの環境に従い、学農（学校農園、バケツの稲作）、遊農（高度の市民農園）、援農（農村へのお手伝い）、楽農（都心の農家の地域交流）、精農（田舎暮らしをもとめ、キラキラ農業）に従事すべし。自らを第5種兼業農家（農業収入には依存しない農家）と考え、「農—こころといのちの科学」を基調に置き、地域の自立の促進、自然豊かな国土の創造、都市と故郷の再生を目指さなくてはならない。



註： 懇親会には講師がご出席になり、宴席たけなわの中ではあったが、講演内容に関連した格調の高い質問が相次いだ。ここでも傾聴すべき講師の卓見が披露され、あたかも質疑応答の二次会のような盛り上がりを見せ、懇親会のありように新しい示唆を与えられたように思われた。

（常務理事 安達勝雄 記）